年下の上司 2

Kaho & Eishi

石田累

Rui Ishida

eternity

エタニティ文庫

目　次

Story1
恋の受難と課対抗バドミントン大会　5

Story2
恋の伏兵と夏休み　166

Story3
二人の父と、年下の上司の試練　243

エピローグ　354

Ｓｔｏｒｙ１　恋の受難と課対抗バドミントン大会

「失礼します」
どうぞ、と二度声を掛けると、扉の向こうに立っていた男は、ようやく室内に入ってきた。
灰谷市役所十階――市長室。
議会日程を確認していた灰谷市長、真鍋正義は、相手の姿を認め、表情を変えずに顔を上げる。
だが、隣室の秘書課に通じる扉が男の手によって閉められた途端、口調だけは砕けさせて言った。
「遅いぞ。電話をしてから、何分経ったと思っているんだ」
「申し訳ありませんでした」
この場合、目の前で頭を下げる男の戸惑いは真鍋にもよく分かった。職員として呼ばれたのか、家族として呼ばれたのか、考えあぐねているのだろう。

梅雨明けの空は快晴で、ブラインド越しに明るい日差しが緋色の絨毯に落ちている。
六月の最終日。季節は、本格的な夏に変わろうとしていた。
「……瑛士」
真鍋は、灰谷市都市計画局総務課の係長であり、同時に自分の息子でもある男の名を呼んだ。
今年の春、約八年ぶりに灰谷市に戻って来た息子、藤堂瑛士。以来、顔を合わせる度に胸に掠める感情を、真鍋はいつも無表情の下に押し隠している。
これから口にすることを、この息子はどういう感慨を持って受け止めるのだろうか。
そう思いながら、真鍋はゆっくりと口を開いた。
「実はお前に話しておきたいことがある。お前の係の、的場果歩さんという女性のことだが……」

1

「今年いっぱいで、役所はもう辞めなさい」

コーヒーを飲みかけていた的場果歩は、「はい？」と思わず訊き返した。
実のところ頭は悩み事でいっぱいで、食欲もないまま、コーヒーだけをすすっていた時だった。
――え、何かしら、聞き間違い？
朝――住宅街のマンション七階にある、的場家の食卓。
傍らのテレビでは、朝のお天気キャスターが、若さと愛想をこれでもかと言わんばかりに振りまいている。七月第二週目に入った昨日、遂に去年の最高気温を越えました、今年も猛暑になりそうですねー云々。
「嘘でしょ？　辞めてどうすんの？　お姉ちゃんの年で、再就職とか難しいんじゃない？」
果歩より先に、隣に座る妹の美玲が、あまり嬉しくない言い方で抗議してくれる。
ようやく我に返った果歩は、冒頭のセリフを言った対面の父親に向き直った。
「あの……なんの冗談？」
「いや、本気だ」
この世には、絶対に他人には言えない父親の職業、というのが存在する。
子供の頃、家の周辺全てが、同じ業種の人々だった頃は特段隠す必要もなかった。
それが十五年前、住宅街のど真ん中に位置するマンションに引っ越した時、果歩も妹

の美玲も、母親から厳しく言われたのだった。
（いいわね。お父さんの職業を訊かれたら、団体職員だと答えなさい！　それ以上のことは絶対に言っちゃだめ！）
その理由が、今なら分かる――的場果歩、三十歳。職業、地方公務員。
「……まぁ、つまりは、永久就職しなさいってことよ」
味噌汁をよそう母の典子が、控え目に口を挟んだ。
「いきなりで驚いたと思うけど、どうせお付き合いしている人もいないんでしょう？　お父さんの職場の人なんだけど、会うだけ会ってみたらどう？」
「え……は、……はい？」
そしてこの世には――絶対に父親に逆らえない娘、というのが存在する。
今の時代、とうに滅んだと思われている家長制度というファンタジーが、この的場家には未だ根強く息づいていた。それもまた、父の職業に少しばかり関係しているのかもしれないが。
納豆を箸で掻き回しながら、渋みを帯びた声で父親は続けた。
「そういうことだ。果歩」
「……あの、でもそれは、……そういうことって」
唐突すぎて意味が分からない。だいたい永久就職先の紹介だけならまだしも、役所を

辞めろなんて、親が勝手に決めること？
「お父さんとの約束を覚えているか、果歩」
鋭い目が、果歩を真正面から睨みつけた。
それだけで果歩は、天敵に射すくめられた被捕食動物みたいに縮こまってしまう。
「お前は、三十歳になったら役所を辞めると約束したんだ。それを条件に、俺はあんな職場にお前を残すことを了承した。違うか、果歩」
声を出さずに、果歩は小さく息を呑んでいた。
そんな約束――それはすごく遠い昔で――でも……でも。
「約束は守ってもらう。いいか、お父さんはな、嘘ついたり人を騙したりする連中を決して許してはいけない立場の人間なんだ。それを絶対に忘れるなよ」

2

「おはようございます」
その朝――覇気のない果歩の声は、たちまち上機嫌な男の声で上書きされた。
「おはよう！　的場君、今夜の準備は万全かね？」

灰谷市役所。都市計画局長室。
都市計画局のトップ。局長、那賀康弘（ながやすひろ）の専用オフィスである。
朝の茶を運んできた果歩は、その那賀の第一声で、今朝の永久就職騒動ですっかり忘れていた、憂鬱（ゆううつ）の種を思い出していた。
――しまった！　どうしてこんな大切なことを忘れてしまっていたんだろう。
昨夜から今朝まで、ずーっと果歩の心を重苦しくさせていた大問題。父があんなことを言い出す前までは、食事も喉を通らないほど、そのことで頭がいっぱいだったというのに。
果歩は、百通りも考えた言い訳を頭の中に並べ立てながら、できるだけ愛想のいい笑いを浮かべた。
「あの――局長、実はその話なんですけど」
「いやぁ、今朝の僕はとんでもなく張り切っているんだよ。何しろ、局のアイドル、的場君とダブルスだからねぇ」
嬉しそうというより、思いっきりはしゃいだ声。
「定年前の最高の思い出だよ。僕のペアはやはり秘書の君しかいない。頼んだよ、的場君！」
片眼をつぶった那賀に、ぐっと親指を突き出され、果歩は――結局は頷（うなず）いていた。

「わ、私のような者でよかったら……」
――どうしよう、断れない……
ここまで上機嫌の局長相手に、一体どうしたら反論などできるだろうか。
那賀が張り切っているのは、来週の日曜に開催される、課対抗バドミントン大会のことである。
毎年秋に開催される、灰谷市役所の全庁行事――職員総合体育祭。
バレーボール、バドミントン、ソフトボール。三つの種目からいずれかを選んでエントリーし、局から一組代表を決める。局対抗の代表戦は秋だが、その前に、都市計画局の代表を決めるための、局予選を行わなければならない。それが、次の日曜なのだ。
立ち上がり、いかにもうきうきと素振りをしながら、那賀は独り言のように続けた。
「しかし、体育祭など何年ぶりかねぇ。わしが局長になって何年にもなるが、うちの局がこういった行事に参加するなぞ、今までなかったような気がするよ」
実際、なかった。八年近く都市計画局に在籍する果歩が記憶する限り、一度もない。
何故なら、局の幹事役になる総務課庶務係で、勝手に不参加と決めていたからである。
そう言えばいかにも怠慢のようだが、体育祭は自由参加で、意思決定は総務課に委（ゆだ）ねられている。都市計画局に限らず、忙しい職場というのは、不参加がむしろ当たり前なのだ。

幹事担当課ともなれば、会場の手配に始まり、対戦表の作成、弁当や飲み物、景品の準備に至るまで、やることは枚挙にいとまがない。恒常的に忙しい職場で、誰が好き好んで仕事でもない厄介ごとを引き受けるだろうか。

「じゃ、今日の夕方、六時だったかな」

定年前の窓際局長――すでに重要なラインからことごとく外されている呑気な那賀は、白髪頭を手で直す仕草をして、茶目っ気たっぷりな目で果歩を見た。

「は、はい」

「的場君は仕事が忙しいだろうから、僕が先に行って待っているよ。ゆっくりしておいで」

「分かりました」

――まずい……

局長室を出た果歩は、気鬱な溜息を漏らしていた。

まさに尋常でない張り切り方をしている那賀は、今日から金曜までの四日間、この近くの市営スポーツセンターのコートを、バドミントンの練習用に借りているのである。

――どうしよう、まさか局長がここまで本気だなんて。

職員体育祭は、どちらかといえば、独身の若者向けイベントである。

昨日、還暦目前の那賀から「僕と一緒にエントリーしよう」と言われた時は、間違いなく冗談だと思って「はい」と笑って頷いた果歩だったが、それが現実になり、しかもこんな大袈裟なことになってしまうとは――

「あー、最悪……」

今朝の父親の無茶振りの時もそうだが、どうしてこうも、自分は流されやすいのだろう。嫌なら嫌、駄目なら駄目で、はっきり断ればいいだけなのに。

バドミントン大会の件での果歩の憂鬱には理由がある。それも、誰にも言えない理由が――

3

「はぁっ？　じゃあ、俺ら、当日は無給で休日出勤しなきゃいけないんですか？」

都市計画局総務課、執務室。

果歩が庶務係の自席についた途端、南原亮輔の呆れ果てたような声がした。

隣席の同僚、果歩より一歳年上の平職員――役所ではそれを主事と呼ぶが、何かにつけてえらそうに振舞う態度の大きい男である。

「まぁ、仕方ないですよ。体育祭は親睦行事であって、仕事じゃないんですから」

南原の対面に座る大河内主査が、溜息混じりにその問いに答えた。

主査とは主事の一級上の階級で、ランクとしては係長級にあたる。部下を持つか持たないかで、係長か主査かに分けられているのである。

「ていうか、無理矢理手伝いに駆り出される俺らには、仕事も同然じゃないっすか」

さらに続く南原の不平には答えず、大河内は呆れたように肩をすくめた。四十二歳、係内では最年長である。普段寡黙で事なかれ主義の大河内が呆れているのは、大人げないことを言っている南原にではない。この場にいない庶務係長——藤堂瑛士に対して、である。

「ま、仕方ないんじゃないですか？　もう参加届を出しちゃったみたいだし」

「ほんとに、なんなんだよ。昨日で最高気温更新だぜ？　この、冗談みたいにくそ暑い時期に」

うんざりしたように呟いた南原は、空席の係長席を一睨みしてから、大きな息を吐いた。

「なんだって、誰も望まない体育祭に参加しなきゃいけねぇんだよ。何考えてんだよ、藤堂の奴！」

果歩もまた、そっと溜息をついていた。

実のところ果歩も——今回に限って言えば——口にも顔にも態度にも絶対に出していないつもりだったが——南原や大河内と同感、であった。

都市計画局が最後に総合体育祭に参加したのは、昭和の時代に遡る。

地方行政の業務量が増加の一途を辿る昨今、都市計画局に限らず、市役所本庁舎に入っている部局は、大抵どこも参加しない。概ね区役所か消防局か——いずれにしても、今の時代の総合体育祭とは、体力自慢の若者が多い部署向けのイベントなのである。

とは言うものの、この場合、正当性は間違いなく藤堂の方にあった。

局内の親睦を図り、職員の福利厚生やメンタル面での充実を図るのも、総務課の仕事である。

参加案内を握り潰していた今までのやり方に問題があるのであって、それを庶務係長である藤堂が、たとえ課内の誰にも相談しなかったとしても——局内で参加者を募り、結果、体育祭に参加することになったとしても、誰にも文句を言われる筋合いはない。

果歩は視線だけで、庶務係でただ一人席を空けている藤堂の席を窺い見た。

——せめて事前に相談でもあれば、一言、やめた方がいいとアドバイスしてあげられたのに。

こうなった以上、果歩一人だけでも味方になってあげたいが、今は雰囲気的に、それもできにくいものがある。

——プライベートでも、今二人は微妙な状況だし……ああ、なんだか藤堂さんに申し訳ない気分。

それにしても、この状態でバドミントン大会とか見合いとか、何故困難とはこうも立

て続けに降りかかってくるのだろうか。
色んな意味で憂鬱になって、果歩は「コピー行ってきます……」と力なく言って立ち上がった。

灰谷市――人口百万を有する政令指定都市である。
生まれも育ちも灰谷市の的場果歩は、その市役所に八年前に採用された行政職員だ。
所属は本庁舎十三階に位置する都市計画局総務課庶務係。果歩の仕事は庶務兼秘書、その他雑事一般といったところである。
その都市計画局は、実は灰谷市役所内にあって、最も前時代的と評される職場であった。
構成員の九割以上が男性、当然、管理職に至っては百パーセントが男性である。女性職員は臨時職員――アルバイト職員とも言うが――を含めても十名に満たない。
ある意味逆ハーレム……と言えないこともないし、実際、ちやほやされる面もないではない。とはいえ、仕事面では女性は常に男性のサポート役。中堅職員といっていい年齢の果歩でさえ、庶務的な仕事と雑用ばかりやらされてきた。
扱いは常に半人前以下。上司や同僚の差別的な態度や物言いに、傷ついたり腹がたったりすることもあったが、それでも果歩は、このままでいいと思っていた。
自分さえ我慢すればこの課は上手く回るのだからと――が、それは、責任ある仕事から無意識に逃げていた、甘えと言い訳に過ぎなかった。
そのことに気付かせてくれたのが、この四月から係長として庶務係にやってきた、四歳年下の上司、藤堂瑛士だったのである。
民間企業出身の藤堂は、様々な手法で局内に改革をもたらした。過剰に雇用していた臨時職員の削減案や、果歩の仕事内容の見直しもそのひとつだ。
とはいえ、課内の反対を押し切ってなされた彼の改革は、様々な混乱と反発を招くことになった。今も、その余波はさらに悪い形で広がり続け、未だ収まる気配さえないのである――

4

果歩がコピーを終えて席に戻ると、係の上席に、見慣れた大きな姿があった。
――藤堂さん。
はっとその刹那、目の前が明るくなったような気がした。
総務課庶務係の係長、藤堂瑛士。
朝からずっと財政課との協議のために執務室を出ていたが、やっと戻ってきたらしい。

一九〇センチ近い長身や、厚みがあって逞しい肩や胸は、いつ見ても相当の迫力がある。なのに、全体の印象は不思議なほど優しくて、見ているだけで癒されるような気持ちになる。

全庁クールビズとあって、ネクタイは締めていない。白の半袖シャツを着た藤堂は、春の頃より一段と若々しく見えた。

彼は、自席で決裁文書に目を通していた。昨日も午後からずっと外出だったため、決裁箱には気の毒なほど起案文が積まれている。黒縁眼鏡の下の目は真剣で、でも、やはりどこか優しく見えた。

――髪、ちょっと伸びてるな。

果歩もまた、優しい目になって年下の上司の様子を窺っていた。

最近は、ずっと忙しくしているから、散髪に行く間もないのだろう。少し伸びた前髪を指で何度か払っている。が、そんな――まるで大学生を思わせる素直な髪型が、余計彼を若く、魅力的に見せていた。その目を覆う野暮ったい眼鏡に、今は心から感謝したい果歩である。

朝から憂鬱な気持ちを抱えていた果歩は、藤堂の姿を見て、口元が綻ぶのを感じた。

が、それは一時で、顔を上げた藤堂と視線が合う前に、慌てて厳しく引き締める。

彼は、果歩にとって上司である以前に――いや、どちらが先に立つのかは分からない

が、先月両思いになったばかりの、恋人でもあるのだ。

もちろん二人の関係は、庁内では絶対の秘密である。

普通であっても、同課、同係で恋人同士などという関係が周囲に知られれば、気を使われるどころか顰蹙を買いかねない。それに加えて藤堂と果歩の間には、さらに厄介な事情があるからだ。

まずは、課内で、「藤堂係長が的場さんを贔屓にしている」「的場さんが藤堂係長を手玉にとっている」等々の意地悪な噂が、常に囁かれていること。

そしてもうひとつ。こちらの方が深刻な問題なのだが――先月公表された、臨時職員の削減案により、藤堂が局中の反感を買ってしまったということである。

都市計画局各課がそれぞれ雇用している臨時職員を減員し、局内でシェアリングしようという、一見合理的でなんらおかしなところがない改革案。

だが――それには、減員される課の課長連中が凄まじく反発した。

藤堂は何度も呼び付けられては説明を求められ、今月初めの課長会には、課長の半数が欠席するという事件さえ起きたほどである。

その臨時職員のリストラで、ある意味一番恩恵を受けると看做されているのが果歩であった。

何故なら九月以降、果歩のいる総務課にだけ専任臨時職員がつくことが、すでに決ま

っているからだ。加えて、総務課――つまり果歩に臨時職員任用決定権があると知った各課の臨時職員たちが、こぞって果歩に媚を売り始めたからでもある。

藤堂にとっても果歩にとっても、なんとも言えない難しい状況。それだけに今の時期だけは、二人の仲は何がなんでも隠しておく必要があった。

だから――今月から、二人はある約束をしているのだ。

「日曜、俺、デートだったんですよねー」

南原がいきなり、唖然とするような独り言を言い始めた。

――嘘でしょ？

と、果歩は内心思っている。

一体どんな女が、雑で口が悪くてデリカシーのない南原みたいな男の彼女になるのか。

肩をすくめるようにして南原は続けた。

「それが、くだらない行事のためにパァ。役所じゃ、忙しい時期にわざわざ親睦行事に参加する酔狂はいませんけど、それも民間さんとの違いなんですかね」

藤堂が、静かに顔を上げた。

傍で聞いているだけで、むかっ腹が立つような南原の嫌味である。なのに、藤堂の眼差しも表情も、全くの普段通りだった。

「皆さんへ断りもなしに参加を決めて、本当に申し訳ありませんでした」

丁寧かつ穏やかに、藤堂は口を開いた。

「日曜は、むろん仕事ではありません。用事がおありなら欠席されても結構なのですが――出ていただけると、大変助かります」

「結構も何も、この庶務係には四人しかいないのに、あんた一人でどうするつもりなんですか」

たちまち南原が噛みついた。

「できもしないことを、えらそうに上から目線で言わないでくださいよ。だいたい局長まで出るような行事に、俺らヒラがおいそれと休めるわけないじゃないですか。嫌でもね、笑顔で出なきゃいけないんですよ。それが宮仕えってもんでしょう」

藤堂は何も答えず、ただ視線だけを落とした。

つまるところ、この場合、どういう答え方をしても無駄なのだ。南原にしてみれば、言いがかりのためだけにふっかけた議論なのである。

「だいたい、今、係の中でどれだけ仕事が滞っているか、藤堂さんは本当に分かっていらっしゃるんですかね。そういうの全部分かった上で、体育祭なんてどうでもいいイベントに勝手に参加を決めちゃったわけですかね」

その後もひとしきり続く南原の口撃を、藤堂は目を伏せたまま、神妙に聞き入っているようだった。が、ようやく南原の嫌味のネタも尽きてきたと思しき頃になって、

「まぁ、仕方ないよ。所詮民間君の浅はかな思いつきだ」
と、隣の係の中津川補佐が、嘲笑うように口を挟んだ。
総務課のもうひとつの係、計画係の係長兼課長補佐。直属の上司という間柄ではないが、藤堂より一つ上の階級の五十代。果歩が見る限り、中津川ほど露骨に藤堂を嫌っている男もいない。
「臨時職員のリストラやら、不必要な女性登用やら……おかげでどうだ。課内の雰囲気が悪くなったばかりか、局内でも我が総務課は孤立状態だ。何もかも、民間の風のおかげだよ」
怒りがじわじわと込み上げたが、果歩は黙って聞くほかなかった。
それも、藤堂がこの程度の嫌味や誹謗にくじけるような男ではないと分かっているから――それにしても、南原と中津川の攻勢は、日増しに強くなっていくばかりだった。
藤堂にとっては部下である南原と、上役である中津川。二人は、四月以来、並々ならぬ恨みを藤堂に対して抱いている。
藤堂のやり方に真っ向から反旗を翻す二人は、これまで度々藤堂にやり込められてきた。中津川は二度、南原は一度、皆が見ている前で、藤堂に赤っ恥をかかされている。
果たして藤堂に相手をやり込めるまでの意図があったかどうかは定かではないが、彼の、悪意の全く見えない笑顔や、悪びれない素直な口調などは、南原や中津川のような

悪感情をむき出しにすることを屁とも思わない人間にとっては、かえってあざとく思えるのかもしれない。
「本当に、ご迷惑をおかけしています」
藤堂は立ち上がり、全く申し訳なさそうに深く頭を下げた。
「僕が、こちらのしきたりを知らないばかりに、大変なご迷惑をおかけしました。お忙しいとは思いますが、人手はいくらあっても助かりますので、ご参加いただけるとありがたいです」
中津川は肩をそびやかし、南原は喉を鳴らすようにして視線を背けた。その間、同じ係の大河内主査は無関心を決め込み、計画係の三人は、馬鹿にしたような苦笑いをかみ殺している。
果歩は――反論したいのを懸命に堪えてうつむいていた。
それにしても、最近の藤堂は、気の毒なくらい低姿勢だ。確かに元々腰の低い人だったが、それでも以前は、柔らかな態度の中にも、気骨というか反骨というか、相手をねじふせる強さのようなものが確かにあった気がする。
何故もっと、厳しい言葉で、理不尽な嫌味に反論しないんだろう。彼のスキルなら、中津川補佐や南原さんなど問題にもならないはずなのに――
果歩はそう思いながらも、やはり何も言えなかった。

今、二人は、本当の意味での恋人同士ではないのである。
両思いになって半月あまり、正直、職場恋愛がこうも難しいものだとは思ってもみなかった。
視線や、掛ける言葉のひとつひとつに、互いの深いところまで知ってしまった男女特有の親密さが出てはしないかと、気になって仕方がない。今の藤堂の立場を考えると、正直、わずかな疑念も持たれたくないと果歩は思った。
そして、もうひとつ――実はこちらの方がウエイトが大きかったのだが、七月に入った頃から、彼自身からも漠然とした迷いを感じるようになっていた。二人でいる時にもふと無言になったり、物憂い目で考え込んでみたり、――果歩の勘違いでなければ、仕事の上で、何かの壁に突き当たっているような、そんな印象を受けたのだ。
――私が……私の存在が、もしかすると藤堂さんの負担になっているのかな。
だから、今月に入ってしばらくして、果歩の方から藤堂に言ったのだ。
もう少し――今の状況が落ち着くまでは、互いに、四月のままの関係でいましょうと。

5

「ていうか、それ、ただの馬鹿でしょ。果歩のことだけど」
友人の宮沢りょうは、呆れたようにそう言った。
昼休憩時の庁舎屋上。七月の半ば、日差しはもう盛夏のそれだ。
この時期、日陰のベンチを取るのは至難の業だが、それでも二人が屋上にこだわるのは、宮沢りょう――人事部人事課勤務、際立った美貌とスキルを持つ友人の、食後の一服のためである。
二人はすでに食事を終え、りょうは、ポケットから煙草のケースを取り出していた。
「何を無駄に年上ぶってるのよ。一度セックスしたくらいで男の心を掴んだ気でいるなら大間違い」
その瞬間、果歩はりょうの口を手で塞いでいた。
「お、お願いだから、そういう過激な言葉を役所の中で言わないでくれる？」
「何言ってるのよ。三十にもなって……」
りょうは辟易したように、果歩の手を押し戻した。

「言っとくけど、恋ほど最初が肝心なものはないのよ。両思いになって二週間もたたないのに、元の関係に戻りましょうってどういうこと？　せっかく彼のハートを掴んだのに、この時期に果歩の虜にしないでどうするのよ」
「と、虜って、そんな……」
「鉄は熱いうちに、ガンガン打たなきゃ。冷めちゃったって知らないんだから」
りょうはそれだけ言って立ち上がると、少し離れたフェンスに背を預け、唇に挟んだ煙草に火をつけた。
全面禁煙――であるはずの本庁舎で、唯一公然と煙草が吸える場所が屋上である。言いかえれば、今のご時世、他に喫煙場所などない。
「ま、果歩のお姉さんぶる気持ちは分からなくもないけどね。……あれだけ上からも下からも噛みつかれている彼の状況で、部下の女性と恋愛関係にありまーすって、ふざけんなって感じだし」
「別に、藤堂さんが悪くて今の状況になっているわけじゃないのよ」
果歩も立ち上がり、風向きに気をつけながら、りょうの傍らに歩み寄った。
「藤堂さんは間違ってないし、正しいと思うんだ。ただ周りの人が、彼が何をやっても反発するばかりで……実際、すごくやりにくい状況だと思うの」
りょうは何か言いたげな目になったが、煙草の煙を吐き出して、再びその目を空に向

けた。
「ま、いいけどね。でも知らないわよ。ぼやぼやしている間に、彼の心を他の女に盗られても」
「うん、まぁ、大丈夫だと思うよ。藤堂さんなら――」
果歩の気持ちはきちんと説明しているし、藤堂も納得してくれたはずだった。
あの日――彼は、果歩の提案を聞いて少し驚いたようだったが、だからといって強い衝撃を受けている風でもなかった。
（的場さんに、そこまで考えてもらって、むしろ申し訳ないと思っています。僕自身は、今のままで問題ないと思っていますが……）
彼はそこで言葉を切って、わずかに考え込むような目になった。
（確かに今は、少し距離を置いてもいいのかもしれません。僕自身も――時々、的場さんにどう接していいのか分からなくなる時がありますから）
そんな風にして、二人は四月の二人に戻ったのだった。ただ、復縁があまり先の約束になってはいけないので、ひとまず夏が終わるまで、という期限をつけた。
藤堂が、意外なほどあっさりと、何ひとつごねることなく果歩の考えを受け入れてくれたことだけが、不満と言えば不満だった。もう少し、動揺めいた表情を見せてくれてもよかったのに。

「ま、藤堂君にしたら、果歩は七年越しの片思いの相手だもんね。そんなに簡単には冷めないか」

りょうはくすっと笑うと、今度は少し訝しげな目になった。

「にしても、その藤堂君だけど、彼みたいな人がなんだってこの時期、体育祭や局内の人間関係ごときでどたばたしてんだろ。おかしいなぁ。彼はもっと高邁な使命を持って、うちの市に来たんだと思っていたけど」

果歩も、そこは溜息で本心を吐露した。

「正直言えば、今、藤堂さんが何を考えているのか、私にもよく分からないの。……体育祭なんて、やってる場合じゃないと思うんだけど」

「ふぅん……」

呟いたりょうは、不思議そうな目で果歩を見た。

「理由聞いてないの？　いくら距離を置いてるからって、仕事の話くらいはできるでしょ」

「まぁ……ちょっと今は、話がしづらい状況っていうか」

恋人でありながらあえて距離を置いているという、この変則的な立場での接し方もまた分からないとは――さすがに言えない。

りょうは、ますます訝しげな顔になった。

「藤堂君が役所に来た目的なんかも聞いてないの？　果歩の奥ゆかしい性格は知ってるけど、もうちょっとズカズカ踏み込んでもいいんじゃない？」

「うん……」

実は、藤堂の採用事情は、他の職員とは大きく異なっている。

履歴ファイルは、極秘扱い。人事部勤務のりょうでも自由に閲覧できない場所に保管されているらしい。

表向きは、社会人枠のテストケース。

民間の風を入れるという名目で、新人でありながら即、局総務課の係長に抜擢された。係長職に昇格する平均年齢が三十代半ばという灰谷市にあって、二十六歳の係長は、まさに破格の扱いである。

ただ、それにはおそらく、一般職員には知らされていない理由があった。

果歩にしても、はっきり本人にそれと確認したわけではないが、藤堂の前職はターンアラウンドマネージャー。その若さにして、企業再生のプロだったのである。

しかも、現市長、真鍋正義の実子だというおまけつき。

「財政破綻に瀕した灰谷市を救うために来たのよ」というのが、りょうの推測だったが、最近そのあたりがよく分からなくなっている果歩である。

いくら様子見期間が必要といっても、凄腕の企業再生のプロにしては、なんだかやっ

ていることが呑気すぎるような――

確かに藤堂が来て以来、都市計画局の雰囲気は少しばかり変わった。様々な面で無駄が省かれ、仕事の流れがスムーズになり――逆に、今まで慣習で通されていた決裁が一切通らなくなった。

確かに、彼は改革をもたらす人なのだろう。

だが、灰谷市での彼の立場は、所詮庶務係長。世に言う企業再生屋が、経営者の立場で企業に乗り込んでくるのとは立場も権限もまるで違う。

そんな藤堂の評判は、局内では真っ二つに分かれている。一部で支持する職員もいるが、おそらく大半からは蛇蝎のごとく嫌われている。

なにしろ都市計画局は、市役所内で最も前近代的な考えがまかり通ってきた部署である。長年、局に居座ってきた四十代、五十代の役付連中の一体誰が、弱冠二十六歳の係長――しかも、傍目にはいかにも優柔不断で頼りなく見える男の改革案など受け入れるだろうか。

いずれにしてもそんな難しい状況の中で、企業再生のプロであるはずの人が、なんだって職員体育祭ごときに血道を上げているのか。

「ま、つまるところ、果歩は不器用で受け身すぎなのね。そもそも職場恋愛向きじゃなかったってことじゃない？」

不吉なことをさらりと言うと、りょうは煙草の吸殻を携帯ケースに押し込んだ。

「で、体育祭、結局、都市計画局は何で出るの？」

「バドミントンだって」

答えた果歩は、今朝からの憂鬱の種をようやく思い出していた。

そうだった、最悪なことはまだあった。那賀局長とのダブルス――

「どしたの、暗い顔になって」

「なんでもない。本当、最近悩み事ばっかで」

「そう？　でもいい大人がバドミントンだなんて、なんだか面白そう。果歩も出るんだったら、私、応援に行こうかな」

「ばっ、な、何言ってるの。私が出るわけないじゃない。幹事だし庶務だし、ただでさえすることが一杯なのに！」

「……？　何、ムキになってるの？」

何もかもりょうに打ち明けたいところだが、百パーセント笑い飛ばされると分かっていることなのでさすがに言えない。

「ああ……」

りょうと別れて、一人階段で執務室に戻りながら、果歩は片手で額を押さえていた。

職員総合体育祭……バドミントン……つまり、球技。

——絶対、ばれちゃう、私が鈍くさい女だって！

果歩は、極度の——俗な言い方をすると、いわゆる『運動オンチ』なのだ。それも、尋常ではないほどの。

こと球技は苦手中の苦手。とにかくボールが絡む競技は全部ダメ。

子供の頃からド近眼だったせいだろう。飛んでくるボールの距離感が、今ひとつ正確に掴めない。果歩が球技をしている光景は、悲惨というよりむしろ滑稽の域に近い。

が、女性にしては比較的長身で、すらっとした体格と、一見勝気そうに見える目元などのせいか、昔からどこに行っても「テニスか何かやってるんでしょ」とか「スポーツ万能なんでしょ」と、勝手に勘違いされてしまうのである。

そして果歩も、極力、周囲の勘違いを否定しないままに今日まで来ている。そんな自分の見栄っ張り加減が、ほとほと嫌になるのだが……

散々溜息をついた後、果歩はようやく気持ちを切り替えた。

——ま、いいか、那賀局長とペアだったら。

なにしろ、今年で定年の老紳士。身長も果歩と変わらない上に、枯れ木のような超痩身。間違っても抜群の運動神経を誇るようなことはないだろう。

どうせ一回戦で敗退する。体調が悪いとか言って、体よく負けてしまえばいいんだから。

が、片付かない問題はもうひとつあった。今朝がた、父がいきなり言い出した永久就職の件である。

——ああ、もうっ、なんだってこうも災難続きなんだろう。

果歩は頭を抱えたくなった。

役所を辞めるのは論外として、永久就職の話そのものも絶対に回避しなければ大変なことになる。父の職場の人なら、一度会ってしまえば最後、絶対に断り切れないに決まっているからだ。

席に戻った果歩は、ちらっと空席になっている藤堂の席を窺い見た。

——せめて今朝の一件くらいは、話した方がいいのかなぁ……

四歳年上のデメリットを、今ほど色濃く感じたこともない。

永久就職……つまるところお見合い。三十女が、二十六歳の男に「お見合いすることになりそうなの」って、いかにも結婚を迫っているに等しいではないか。

三年付き合った元彼にも、おそらくはそれで引かれた。果歩が、結婚を迫るような言い方をしたから——

果歩は再度溜息をつき、やはり藤堂には話さないでおこうと、心に決めた。

6

「あ、的場さん、コピーなら私に頼んでくれればいいのに」
午後――コピールームを出た途端に声を掛けられ、執務室に向かっていた果歩は足を止めた。
振り返ると、背後には丁度コピールームに入ろうとしているらしい、都市デザイン室のアルバイト職員、富永悠美が立っている。
両親が公務員だという悠美は、先月まで、いつも自席で男性職員としゃべっているような、あからさまな『花婿探しバイト』の一人だった。
「今日の郵便の仕分け、やっておきますから」
と、悠美はにこやかに果歩に笑いかける。
「あ、どうも」
「なんでも言ってくださいね！」
課が隣ということもあって、ついつい果歩も頼ってしまう。果歩だけでなく、同僚の南原や計画係の職員も、結構仕事を頼んでいる。

――ありがたいといえば、ありがたいんだけどなぁ……
悠美がコピー室に入るのを見届けて、果歩はそっと溜息をついた。
「ああも露骨だと、疲れるでしょ」
その内心を、いきなり男の声が言い当てた。
果歩は、心臓が止まったような気持ちになって立ちすくむ。
「哀しいくらい必死だね。いい年した若い子が、将来の見えないバイトにしがみついてなんの意味があるんだろ。そりゃ、正規職員以上にこの職場を大切に思っているから――ってなんでやねん」
いきなりのノリツッコミ――しかも、微妙に外れて痛々しい。
果歩の前に立っているのは、都市デザイン室の主査、窪塚桂佑だった。
ぼわんとしたブロッコリーみたいなアフロヘアに、くたびれた技師服。そして何故か真紅のバスケットシューズ。服装の奇異さもさることながら、この都市計画局で、果歩が最も苦手にしている男性職員の一人である。
「それにしても、あの豹変ぶりは見事だね。ついこないだまでは、的場さんの悪口ばんばん言ってたような気がするけど、あ、気のせいか。こりゃ失敬」
いつものことだが、独り言なのか話しかけているのか、はっきりして、と言いたくなる。
しかも、当の悠美本人が、すぐ傍のコピールームにいるというのに……

果歩の心配などどこ吹く風で、飄々と――やや女性的な、甲高い声で窪塚は続けた。

「総務としては気分いい？　とはいえ、臨時職員のリストラは、やり方が鮮やかなだけに後味が悪かったね。課長連中を軒並み敵に回したのが痛かった。普段から臨時を遊ばせてたくせに、いなくなるとやれ大変だと大騒ぎ。人間は、無能な奴ほど既得権にこだわるからね」

頭が、彼の早口に追いつかない。なんとも答えようがない果歩である。

いかにも変人然としているが、都市デザイン室の窪塚といえば、庁内でも有名なエリートで、将来、局長級までの出世は確実だと看做されている男であった。

二十代後半でロサンゼルス市役所派遣という栄光を掴んだ彼は、帰国後、即主査に昇格した。三十二歳で主査というのは、藤堂などの別格を除けば役所内では最速の係長級なのだ。

気付けば、すでに果歩に興味を無くしたように、窪塚はすたすた歩き出していた。

相変わらず意味不明――なのに、すごく嫌なところを突かれた気になるのは何故だろう。

先月、いきなり局の方針として定められた臨時職員の人員減――言ってみればリストラ。

その噂が広まった途端、のんびり花婿探しをしていた臨時職員たちの態度は、手のひ

らを返すように一変した。そういう意味では目の覚めるような効果があったが、各課の課長連中は相当頭に来たようだった。

役所というのは、予算取りが非常に難しく、一度手にした予算を手放してしまうと、よほどのことがない限り二度とつかない。臨時職員の雇用も、当然のことながら予算要求を経て行われる。年度途中に、自らその権利を手放してしまえばどうなるか。そんな前例は聞いたことがないが、来年度以降も減員状態が続くということだけは間違いない。

自席に戻った果歩は、重たい溜息をついて、自分の前の席を見た。

六月まで総務で雇っていた臨時職員――妙見瑞江が座っていた席。そこには、今、南原の書類がうずたかく積まれている。

臨時職員のリストラが実施されるのは九月以降の話だが、今のところ、その余波を一番食らっているのが総務課だといってよかった。

なにしろ、辞めてしまった妙見の後の臨時職員がつかない。予算はあるはずだが、未だ上からゴーサインが出ないまま、臨時の机はずっと空席になっている。

同じく空席になっている庶務係の上司――藤堂の席を見ながら、果歩はわずかに眉を曇らせた。

（大変申し訳ないのですが、九月以降臨時職員を減員する関係もあって、九月まで新規雇用は控えようという話になりました。皆さん、お忙しいとは思いますが、九月までは

他課の臨時さんに協力してもらって乗り切りましょう）

先月の終わり、藤堂の口から総務課全員に説明があった。課長以上はすでに了承していたようだが、計画係の中津川補佐は相当憤慨していたし、他の職員も表には出さないものの、概ね似たような反応だった。

果歩には、漠然と察しがついた。総務課は、つまるところ九月以降のリードケースなのだ。

来客が最も頻繁で、局庶務が行う雑務が最も多いのが総務課である。正直、他の課では、お茶汲み程度の需要しかない臨時職員でも、総務課にとっては、相当重要な戦力になる。総務課に臨時職員がつかないことなど有り得ないし、他局にも例がない。

その総務課でも臨時がいなくてもやっていける――という実例を示すために、いわば九月以降の局の規範となるべく、今、あえて臨時職員をつけない形で業務するよう求められているのだ――

「的場君、二時から六人、来客だ」

不意に、次長室から局次長の春日要一郎が顔を出し、それだけ言って即座に引っ込んだ。

春日要一郎――那賀局長に次ぐ都市計画局のナンバー2であり、実質的なボスである。五十代前半での局次長は、役所でも相当早い昇進パターンといっていい。

同時に春日は、藤堂の正体を知る者の一人であり、彼の、局内唯一の後ろ盾でもあった。

「はい、分かりました」

答えながら、果歩は卓上のメモ紙に、春日の指示を手早くメモした。

春日と果歩の間には、長年、春日の優しさと果歩の誤解から来た、わだかまりと溝があったが、先月、その溝はついに埋まり、二人の間には目に見えない雪解けが訪れた。

だが、それはあくまで目に見えない感情の深い部分での話であり、表向き、春日の態度は何ひとつ変わらない。だから、果歩も変えようがない。今でも、春日は気短で怒りやすい、過酷なまでに厳しい上司で、果歩は、その春日の前に立つと、猫の前の鼠みたいに縮こまるしかない部下だった。

――二時かぁ……これから定例報告があって、すぐ会議だから、自分で用意するのは無理だな。

果歩は、メモを見ながら、微かな溜息を洩らした。

この場合、臨時職員に頼むしかないことは分かっている。しかし、「なんでもやります」と張り切っている彼女たちの背後には、総務課のやり方を面白くないと思っている各課の課長らがついているのだ。ただでさえ、南原や計画係があれこれ些細な仕事まで頼んでいるのに、これ以上仕事を増やしたら、また課長たちに睨まれてしまう。

総務課に臨時職員さえついていれば、お茶汲み程度の仕事なら簡単に頼めるし、頼んできた。さほど負担になることもない仕事だから――が、それを毎回果歩一人の手でや

れと言われれば、相当辛いと言わざるを得ない。
総務の来客頻度は余りにも多く、下手をすると、一日中コーヒーを出すために立ったり座ったりという日もあるからだ。
来客用の湯茶のことだけではなく、職員用のお茶出しも、今となっては相当な負担になっていた。
庁内では、形式的に職員間での湯茶接待は禁止――ということになってはいるが、臨時職員を持つ課では別で、臨時は正規とは違うという漠然とした理由から、総務課でも、朝、昼には必ずお茶を出し、コーヒーは切れたら随時作る流れになっている。それらは、臨時職員が不在の今、女子職員――つまり、実質果歩一人がやっているのだ。
それに加えて、五時には使用済みカップを洗わなければならない。日中洗う間もないカップは、来客用も含めると、夕方には籠に山盛りになっている。
ひとつひとつは大した仕事ではないが、今、果歩が抱えている仕事の量を考えると、決して馬鹿にはならない仕事なのである。
「すみません、今日は四時まで会議に出ますので」
定例報告の仕事を終え、果歩は周囲に断ってから、立ち上がった。
「来客があったら、デザイン室の臨時さんにコーヒーをお願いしてください。声は掛けてから行きますので」

「郵便も忘れずに頼んどけよ」
いつも不機嫌そうな南原の、要求とも嫌味ともつかない声がした。
「ったく、藤堂が来てからどうなってんだよ。いちいち他所の課に頭を下げなきゃ回らない総務なんて、聞いたことがねぇよ」
果歩は、それには答えず荷物を抱えてカウンターを出た。
果歩が今、勤務時間のほとんどを割いて取り組んでいるのは、この灰谷市の都市計画の歴史をまとめた編纂史――その編集をするための事務局の仕事だった。
たった一人の事務局員である果歩は、週に一度、編集のための会議を開催しなければならない。大学や他部局の執筆者を呼んでの編纂会議。週に二時間程度だが、日程や時間の調整、資料の整理など、とにかくその前後は、どうにもならないほど忙しい。
その分、どうしても席を空ける時間が長くなる。その間のお茶出しや郵便物の仕分けは、他課の臨時職員に頼らざるを得ないのだ。
「すみません、留守の間、よろしくお願いします」
隣り合わせの都市デザイン室に行き、果歩は、庶務担当係長でもある課長補佐に頭を下げた。
「いいよ。しかし、大変だね、総務も」
が、そう言ってくれた補佐の背後から、「うちばかりに頼まれても困るよ」と、そっ

けない声がした。
都市デザイン室長の声である。職名は室長だが、級で言えば課長級。
「総務課には予算があるんだ。横着をしないで、さっさと新しい臨時を雇用しなさい」
「……すみません」
果歩は頭を下げ、気鬱な思いを抱いたまま、都市デザイン室を後にした。
この悩みもまた、藤堂には打ち明けられない。たった二カ月、果歩一人が我慢すればいいだけのことだし、これ以上藤堂を悩ませたくないからだ。
臨時職員の妙見がいなくなっても、仕事は確かに回っている。が、ストレスだけは日に日に濃く積もっていく。そんな感じだった。

7

会議を終え、再び執務室に戻った時には、午後四時を大きく回っていた。
見ると、机の上には相当重みがありそうなビニール袋が積まれている。
それが、先日業者に発注した湯茶の類だと気づいた果歩は、急いで袋を抱えて給湯室に向かった。半年分くらいをまとめて購入したから、指がちぎれそうなほどの重みがある。

今から、この大量の品物をきちんと分けて戸棚に納めて――
妙見がいたら、としみじみと思う。さすがにこんなどうでもいい仕事まで、他課の臨時に頼めない。実際、果歩の仕事はそんな些細な雑事の積み重ねのようなものなのだ。
「あ……」
給湯室に足を踏み入れた果歩は、思わずその足を止めていた。
丁度、藤堂が出てこようとしている時だった。二人は入口付近で双方同時に足を止め、そのまま、しばし見つめ合った。
「持ちますよ」
気まずいというのでもなく、ときめくというのでもない。奇妙な沈黙を破ったのは、藤堂の方だった。彼はにこっと笑って、普段通りの表情で果歩を見下ろした。
「今、どこに納めたらいいのか確認していたところだったんです。それくらい、僕がやりますよ」
「え、いいですよ。そんなこと――」
「的場さんなら、脚立でも使わないと無理なんじゃないかな」
ごく普通に、彼は果歩の手から袋を受け取り、その刹那に二人の指が触れ合った。果歩は、心臓がきゅっと収縮するのを感じたが、藤堂は憎いほど平然としていた。
長くて形のいい藤堂の指。その指で、彼は果歩の全てを暴いたのだ。身体も……心も、

何もかも。その時の肌の熱さや、自分の見せた反応を思い出すと、今でも全身が熱くなるほどだ。

「いいですよ。席に戻られても」

背を向けて、シンク上の吊り戸棚の扉を開けながら藤堂が言った。

「仕事、忙しいんでしょう。六時からは局長とお約束をされているようですし」

「はい、――いえ。でも手伝います。私の仕事ですから」

果歩は、シンクの上で品物を選別し、上の戸棚にそれを納める藤堂に手渡した。

――藤堂さん……今、何を考えているのかな。

正直言えば、距離を置こうと決めて以来、藤堂の態度は、果歩には今ひとつ謎だった。

果歩が言い出したことだから文句も言えないが、それにしても素っ気なさすぎる。せめて電話とかメールとか――視線でもいいから、特別な関係だという合図が欲しいのに、藤堂はそんなことまで四月に戻してしまったようだった。

聞きたいことも、話したいことも沢山ある。

どうせ出るならバドミントン大会も、局長ではなく藤堂とエントリーできたらよかったのに――

そんなことを思いながら、果歩は、ふっと息を吐いた。

私から、合図を送ればいいのかな。――ああ、でも、そんなことをしたら、今までの

決意も我慢も、全部ぐだぐだになっちゃいそうな……

「さてと、こんなものでいいかな。随分奥に入れてしまったから、下ろす時はいつでも声を掛けてください」

藤堂が振り返る。それだけで、狭い給湯室の密度がますます増したような気がする。

けれど、視線が絡んだのは一瞬で、藤堂はすぐにシンクの上のビニール袋を片付け始めた。せっかくの二人きりなのに――このまま、何も話せずに終わってしまうのだろうか。

「あの」

果歩が、庁舎の屋上から飛び降りるような気持ちで思い切って口を開いた時だった。

「職員用のお茶出しやコーヒーの準備などは、臨時さんに頼んではどうでしょうか」

ビニール袋を棚に収めながら藤堂は、果歩の目を見ないままで言った。

「言いにくければ、僕の口から頼んでもいいです」

果歩はしばらく黙り、内心、そんな話か――と、身勝手な失望を感じていた。

そしてやはり、藤堂の目を見ないままに言った。

「仕事はお願いしています。コピーや、来客のお茶や……他にも色々、申し訳ないくらい」

雇用元課の課長に、いくら皮肉を言われようと、頼まなければどうしようもないからだ。

「でも、うちの職員へのお茶出しを頼むのは、ちょっと違う気がしますから」

「的場さん、それは――」

彼が何か言いかけた時だった。軽やかな足音が、急速に給湯室に近づいてきた。
「あ、藤堂さんっ。みーつけたっ」
振り返るまでもない。都市計画局のアイドル、都市政策部所属の須藤流奈である。
入庁二年目、小柄でキュートで、愛くるしい顔立ちをした流奈は、甘えた目で藤堂を見上げた。もちろんその視野に、果歩は最初から入っていない。
最近鳴りを潜めていた流奈がどうして——と、思った時だった。
「藤堂さん、今度は流奈のこと、ちゃんと誉めてくださいねッ。うちの政策部、二組が日曜の予選にエントリーです！」
「そうですか」
果歩にもそれと分かるほど、藤堂の横顔が明るくなった。
「バドミントン大会のこと、私、頑張って宣伝してますから、当日はうちの課から沢山応援に来ると思います。なんたって、私が参加するんですから」
そう言った流奈が、初めて果歩を見上げて鼻先で笑った。
その勝利者のような余裕の目に、果歩は激しく動揺している。流奈は、勝ち誇ったような声で続けた。
「的場さん。実は私と藤堂さん、二人でエントリーするんですよ」
——はい……？

「ペアで、バドミントン大会に出るんです。だから的場さんとは、敵味方ですね」
果歩はしばし、その言葉の意味を考えていた。
「確か的場さんは、那賀局長と出られるんですよね」
藤堂がその後を継いだが、それは気のせいではなく、妙に慌てて、言い訳めいていた。
ようやく事態が——少しずつだが呑み込めてくる。
果歩はただ呆然としていた。
冗談でしょ？
まさか、今みたいな深刻な状況で。
体育祭に参加することさえどうかと思うのに、その上流奈と仲良くエントリー？　私が、自分の身を引いてまで、守ろうとした彼の立場って……
藤堂の傍らで、流奈は面白そうな目で果歩を見ている。
彼女は、藤堂の正体も、果歩との関係も知っているという、少しばかり厄介な存在だった。先月、その流奈に完全勝利したのは確かに果歩のはずだったのに、なんだかその立場が、たちまち逆転してしまったようだ。
「あの——男女のペア枠というのがあって、うちは女性が少ないですから、課別ではなく」
「そうなんですかー」
果歩は、藤堂を遮るようににっこりと微笑んだ。その刹那、藤堂が口ごもるのが分かる。

口元だけでにこやかに笑って果歩は続けた。
「じゃ、お互いベストを尽くすってことで。失礼しまーす」
——もう知らない、あんな男、こっちから願い下げよ。
給湯室を出た途端、堪えていた怒りが一気に込み上げてきて、果歩は両拳を握りしめていた。
一体私が、どんな気持ちでいたと思っているの？
距離を置こうと決めてから数日あまり、どれだけ寂しくて、どれだけ心細かったか、あの人は本当に分かっているのだろうか。
——もしかして藤堂さん、勘違いしてるんじゃないの？　距離を置く、イコールフリーみたいな。
だとしたら、馬鹿だとしか言いようがない。もしそんなふざけた勘違いをしているのなら、藤堂さんなんてこっちから——
果歩は、足を止めていた。
わずか数メートル前、書類を片手に忙しげに歩いてきた男と、真正面から視線が合う。
見栄えのいい、すらっとした長身。この部局にあっては、人目を引く端整な顔だち。
前園晃司。

果歩にとっては、三年も付き合った挙句、二股をかけられた元彼である。
多分、別れた。はっきりと確認し合ったわけじゃないけど、果歩の気持ちは相手に示したつもりだし、晃司もまた、藤堂に殴られたあの日以来、果歩を他人のように無視している。
その日も晃司は無表情で視線を逸らし、忙しげに果歩の横をすり抜けて行った。

8

——あれ……？
那賀が、バドミントンの練習のために予約した、市営スポーツセンターの受付。
受付簿にサインしようとした果歩はボールペンを持ったまま、瞬きをした。
使用者欄のところに、那賀局長のサインがある。が、その文字は、どう見ても達筆な那賀の筆跡ではない。
——他にも誰かいるのかな？
果歩は首をかしげながら、サインをして受付を済ませ、更衣室で持参したジャージに着替えた。長い髪をまとめ、鏡の前に立つと、どう見ても傍目には張り切っている自分

がいる。
「……格好だけなのよね、私の場合」
気は重いが、目上の人を待たせてもいけない。急いで室内に入った果歩は、しかし、そこに意外な人の姿を見て、思わず足を止めていた。
「……おう」
広い室内には、球技用に三つのコートがしつらえてある。コートの隅には筋トレ用の器具。その器具で何人かが黙々とトレーニングをしている。
コートの中央に立っているのは一人だけだった。
綺麗な長身、端整な横顔。ラケットを片手に持つ男は、黒のスポーツシャツを身につけている。
「……晃司？」
果歩は、呆然と呟いた。
前園晃司。ついさっき執務室ですれ違ったばかりの元彼である。
まだ、目の前の現実が信じられず、果歩は、呆けたような瞬きを繰り返した。
「ど、どうして……」
というより局長は？
背後を振り返るが、むろん、そこには誰もいない。

「局長なら来ないよ。俺がピンチヒッターだから」
背後から晃司の声がした。果歩は慌てて、視線を戻す。晃司は面倒そうに、素振りをする仕草をした。
「持病の腰痛が急に出たんだってさ。で、俺に代理で出ろってことで」
「え？」
戸惑う果歩とは対照的に、晃司の態度はなんでもないように平然としている。そして、おもむろに顔を上げ、こちらに歩み寄ってきた。
はっとした果歩は、思わず身構えてあとずさる。
最悪な別れ方をした五月。晃司は果歩の目の前で藤堂に殴られるという屈辱を味わった。
正直言えば、今でも果歩は、晃司の顔を見ると怖くなる。
負けん気の強い晃司の性格からして、あんな屈辱をあっさり流せるとは思えないからだ。
「そんなに、怖がんなくてもいいよ」
しかし、晃司は足を止めると、少し疲れた横顔を見せて言った。果歩にラケットを渡し、再び背を向けて歩き出す。
「コート、そっち入って」

「……え」
「一時間しかできねぇから。仕事残してるし」
——まさか、晃司が？
「も、もしかしなくても、本気で出るつもりなの？」
「しょうがねぇだろ、局長命令じゃ」
仕事一筋というより、出世欲の塊みたいな晃司は、こんなイベントには、まず出ない。しかも、局長命令とはいえ、那賀は、晃司が定年間際で何の力もないと、端から馬鹿にしていた相手である。
——わ、訳分かんないよ。局長にしても、なんだって晃司を指名するの？
普段、接点があるとも思えないし、若い男性なら局内にはわんさといる。
その中で、よりによって、なんで——晃司？
果歩が動けないでいると、コートの中央で足を止めた晃司は、少し気まずげに視線を下げた。
「悪かったよ、……色々」
「……」
「別れたいっつーなら、……てか、もうとっくに別れてんだろ」
吃驚するほど素直な晃司の言葉に、果歩は戸惑いながらも、やや気まずく頷いた。

晃司は小さく嘆息し、ようやく顔を上げて果歩を見つめた。
「試合のことは、マジで局長に頼まれただけだから。本当に心配しなくてもいいよ」
無表情に近い顔は、普段、職場で他人行儀に接している時と同じである。
「他意はないし……ちょっと、今回は、負けられねぇ事情もあるし」
負けられない事情？
「ま、短い間だけど、よろしくな」
それだけ言うと、晃司は再び背を向けて、すたすたと向こう側のコートに入っていった。
「んじゃ、軽く打ってみるか」
「え、う、うん」
というより、ペアの変更はいつなされたんだろう。五時前に藤堂さんと話した時には、那賀局長と私がエントリーすると、彼自身も言っていたはずなのに。
とすると、その後……？　待ってよ。じゃあまるで、藤堂さんへのあてつけみたいに、晃司とペアを組んだと思われているんじゃ……
「行くぞ」
「えっ？」
軽く——と言ったくせに、それこそ見た目通りスポーツ万能の晃司は、いきなり鋭い球を打ってきた。

「き……っ」
悲鳴をこらえつつ固まった果歩の右をすりぬけて、シャトルは床に落下する。
「ご、ごめん」
それを拾い上げた果歩は、打ち上げようとして、何度もラケットを空振りさせた。
「……？」
晃司が訝しげな目になっている。
もちろん、晃司が果歩の運動オンチのことなど知るはずもない。二人のデートは大抵晃司の部屋に限られていたし、二人でスポーツをする機会なんて、今まで全くなかったからだ。
三度目の正直で、シャトルがようやく相手コートに届く。
バドミントンなんて絶対にやったことがないくせに、見事なフォームで晃司がそれを打ち返す。
固まったままの果歩を慮ってくれたのか、それは、大きく、緩やかに円を描き、きっちり頭上に返されてきた。
「え、……えいっ」
思いっ切り……振った。しかし、ラケットはあえなく空を切り、果歩は勢いあまって腰をつく。

立ち読みサンプルは
ここまで

てん、てん、と背後でシャトルが跳ねながら転がる。
「……果歩、お前……」
目の前では、晃司がぽかんと口を開けていた。
「も、もしかして……」
さ、最悪。
「……運痴……？」
最悪。ああ、もう――最悪。

9

「すみません。無理をお願いしますが、急きょ、僕もバドミントンの試合に出ることになったものですから」
「まぁ、いいですよ。僕なら、忙しい方が気が楽ですから」
昼休憩。係長席で頭を下げる藤堂を見る大河内は、やや困惑顔だった。
「職員体育祭なら、区役所にいた頃、幹事をしたこともあるんです。当日の仕切りなら任せてもらって大丈夫ですよ」